

育苗期の肥培管理の違いがとちあいかの年内収量等に及ぼす影響

要約

「とちあいか」に適する育苗期の施肥量を検討した結果、施用窒素成分量 120mg/株の区では、置肥のみの区に比べて液肥を併用した区で頂花房の花数が増え、年内収量が増加した。一方、施用窒素成分量 180mg/株の区においても年内収量が多い傾向にあったが、頂花房出蕾後の芽なし発生率が高かったことから、処理の中では施用窒素成分量は 120mg/株とし、液肥を併用する施肥方法が適すると考えられた。

○ 展示のねらい

「とちあいか」は花房当たりの着果数が少なく年内収量が十分に確保できない事例が散見される。頂花房の着果数については、花芽分化期の管理が大きな影響を及ぼすことが考えられることから、育苗期後半の肥培管理が年内収量等に及ぼす影響を調査し、課題解決の資とする。

○ 主な成果

表1 処理区の概要

処理区	株当たり施用窒素成分量
処理①	120mg（置肥120mg）
処理②	180mg（置肥180mg）
処理③	120mg（置肥90mg+液肥30mg）
処理④	180mg（置肥150mg+液肥30mg）

※液肥は7月下旬から1週間毎にN5mgずつ6回施用

表2 頂花房の開花状況、芽なし発生率、収量

処理区	頂花房の開花状況と芽なし発生率			推定収量	
	開花揃い (月/日)	花数 (花/花房)	芽なし発生率 (%)	総収量 (g/株)	うち年内収量 (g/株)
処理①	10/16	13.6	20	516	215
処理②	10/22	17.6	30	527	241
処理③	10/22	17.5	10	532	253
処理④	10/22	17.2	50	469	287

※推定収量は果数及び果実径を調査し算出

※総収量は2月末日まで、年内収量は12月末日までの推定収量

処理区は、施用窒素成分量を 120mg/株と 180mg/株の2水準とし、それぞれ施用方法置肥のみと液肥併用の2水準をとり、合計4処理区を設定した（表1）。

頂花房の開花揃いは、各区ともほぼ同時期となり、花数は処理①で少なかった。頂花房出蕾後に芽なしとなる株が各処理区で発生した（写真）が、特に処理②及び④で多かった。

推定の年内収量は、処理④>③>②>①の順で多く、処理④は1月下旬から2月中旬にかけての収量が低下したため、総収量は、処理③>②>①>④の順で多かった（表2）。



○ 今後の方向性

頂花房の収量確保に向けて、適正な施肥量と置肥と液肥の併用を推進する。また、本展示ほでは芽なしの発生や12月後半の収量低下が課題となったことから、最適な施肥方法の検討を継続する。なお、今回の処理は親株をプランターに定植し子苗をポリポットに受ける育苗方法で実施したが、育苗方法によっては適する施肥量や方法が異なる可能性がある。

実施機関： 下都賀農業振興事務所経営普及部 実施場所： 小山市
問合せ先： 栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315